

うめくさ-2

雑草図鑑のはじめ

雑草にかかわるものにとって「雑草図鑑」は欠かせない。今でこそ、大きな書店に行けば「雑草〇〇」、「〇〇の雑草」という本はずいぶん目に付くようになったが、昔はそうはいかなかった。広辞苑(第三版)によると「図鑑」とは「写真や図を系統的に配列して、解説を加えた書物」とある。大昔の本でみると、「農業全書(宮崎安貞 1697)」には作物の解説に図がついており、中国の漢葉の集大成である「本草綱目」の和刻版や「大和本草(貝原益軒 1709)」などにも図があるが、これらは「図を配列」、すなわち図を主体としたものとは見なしにくい。ため、「図鑑」とは呼ばれていない。一方、江戸時代にたくさん刊行された植物の図譜、例えば「本草図譜(岩崎濯園 1828-1844)」などは、「精密な図が系統的に配列」されているものの、「解説」の比重が小さいために、やはり「図鑑」とは見なされにくい。「図」が主体で適切な「解説」のついた「植物図鑑」としては、小野蘭山・島田充房著の「花彙(1765)」が日本での最初とされている。

雑草図鑑については、北海道の俵 浩三氏が、「明治40年ころは植物図鑑の花ざかり」として、この頃に刊行された特定分野の植物図鑑のひとつに、「阪庭清一郎『雑草』(松栄堂 1907)」をあげているので(牧野植物図鑑の謎 平凡社新書 1999)、これが最初と考えられる。同書の凡例の一番に「本書は、主として農作物に害ある雑草の研究に資せんがために、ものしたるなり。」とあるので、農業の雑草防除の視点で書かれたことがわかる。しかし、農家よりは一般家庭に普及したものらしい。種ごとに線画と形態、雑草害の様相などが記され、「包丁、鎌等」を用いた「除草」方法が述べられている。この本は農山漁村文化協会の明治農書全集第12

巻に、全集唯一の雑草関係書物として収録された。なお、明治農書全集の配本案内である「明治農書全集 月報 1984年10月」に、竹松哲夫先生が「世界の雑草学の開祖 半澤洵」の記事を寄せておられるが、「雑草学(半澤洵 1910)」は残念なことに同全集には収録されなかった。

この「雑草」は、年号が明治から大正に改まってから1913年に「雑草の研究」として改めて刊行された(図-a)。前版との違いは、「一本書は、曩に発行せる『雑草』とは、大に其の趣を異にせり。即ち雑草の数二百餘種を植物学科名の下に排列し、其の特徴及び関係を研究するの便を謀りたり。」と述べられている。「雑草の研究」での収録種数は、「雑草」での131点から207点に増加し、配列が、「畑地に生ずる雑草」、「水田に生ずる雑草」といった生態的区分から、科ごとに変更されたが、文章には変更はない。阪庭氏は、この時期に萱場柔壽郎氏と共著で「野外植物(1905)」と「新編植物図説(1909)」を出している。

阪庭氏が、雑草を畑、水田、畦畔などの生態的条件で区別して記述したのは卓見であり、雑草の研究の上では有効である。「新編植物図説」でもこうした区分で植物がくくられている。しかし、「雑草の研究」でこれを清算して科の単位ごとに戻してしまったのは惜しまれる。おそらく、他の植物図鑑類の傾向に押されたのであろう。

さて、増補された「雑草の研究」の中、唯一和名抜きで載せられているのが、54番目の「アムシンキヤ(紫草科 ムラサキクワ)」で、この種のみ「口絵参照」となっていて(図-b)線画を欠き、次の解説がある。「此草は、北米カリホルニアの原産にして、子葉は細く、其の先端は、深く二裂して、剛毛あり。本葉は、披

針形にして互生し、茎葉共に白き剛毛を生ず。多くの枝を分かち、六月頃、合瓣にして四裂せる、橙黄色の小花を、巻繖花序に排列し、四子を有する果實を結ぶ。此の實は、成熟すれば直に落ちて、発芽し、四・五枚の本葉を生じて越冬す。本品は明治四十年七月、仙臺市の北郊荒畑にて採集したるものなり。」要するに帰化雑草のハシリである。日本に來ているムラサキ科 *Amsinckia* 属の帰化植物は、現在ワルタビラコ (アラゲムラサキ *A. lycoposoides* Lehm. = *A. barbata* Greece) とハリゲタビラコ (*A. tesellata* A. Gray) に整理されている (神奈川県植物誌2001)。「雑草の研究」の図と記載でははっきりしないが、宮城県では「アラゲムラサキ *Amsinckia barbata* Greece (帰化) (宮城県植物目録 2000 宮城植物の会・宮城県植物誌編集委員会)」が知られているので、阪庭氏が採集したのもこれである可能性が高い。「神奈川県植物誌2001」によると、ワルタビラコは1951年、ハリゲタビラコは1915年に最初に採集されているので、阪庭氏が明治40 (1907) 年と記したことは、上記よりさらにさかのぼって「アムシンキヤ」が帰化していたことを示唆しているが、今となってはわからないのかも知れない。

「雑草の研究」の207点の中で帰化植物にあた

るのは、ノボロギク、ハルノノゲシ、アレチノギク、イヌムラサキ、アムシンキヤ、ニシキタイゲキ、オオニシキソウ、シロツメクサ、ハハキギ、ツルイタドリ、ヒメスイバ、ツルドクダミ、シラゲガヤ、ドクムギの14種であるが、類似種の解説の中にはヒメムカシヨモギ、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリといったものも出てくる。現在に比べて防除が容易そうな気がするが如何であろうか。

「雑草」という本はかの詩人竹久夢二氏も出しているが、1941年に石川光春氏の同名の書がある。この緒言には「普通に雑草と謂へば畑や庭の邪魔になり、少しく放置すれば後より陸続と生えて来て、しぶとく五月蠅い無くもがなの野草の事であり、或いは単に打ち茂る野草をも謂ふ。」とあるが、耕地雑草ではなく植物一般の記事が掲載されている。海外では、1935年にイギリスで「WEEDS WEEDS WEEDS (Sir Charles Vernon Boys)」という本が出ていて、その2版では27種の雑草の生態と防除が記述されているが、図表は全くない。図の付いたものでは、同じく1935年にアメリカで出た「Weeds (W. C. Muensher)」がある (1980年刊の第2版による)。

雑草学会誌の「雑草研究」と阪庭氏の「雑草の研究」とは1字違いだが、特段の関係はないようだ。 (も)

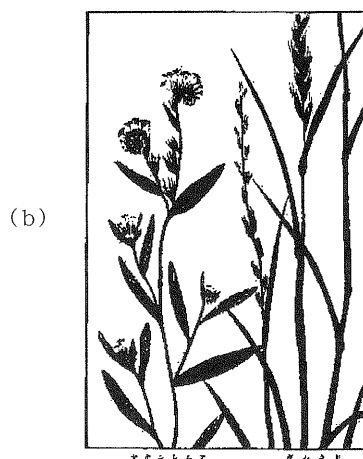
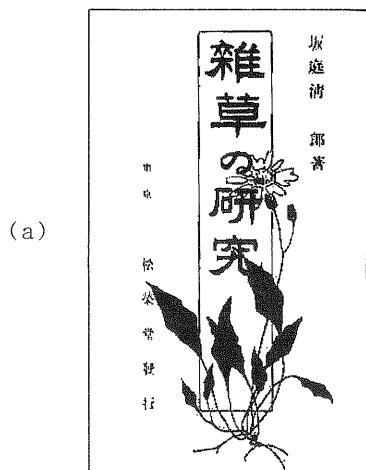


図 阪庭清一郎著「雑草の研究」から扉 (a) と「アムシンキヤ」を含む口絵 (b)。